

## 特集

## さまざまなきょうぶのば



職業訓練で看板作りに取り組むストリートチルドレン  
提供：(特活) シャブラニール

学校へ通えなくなった「不登校」の子どもたちがいます。彼ら、彼女らの発する言葉や表情には、この社会の有様を浮かび上がらせるとも大切なメッセージが含まれているように感じます。多くの子どもたちが学校にいる時間を、彼ら、彼女らはどのように過ごしているのでしょうか。彼ら、彼女らが心の底から笑える場とはどのような場なのでしょう。

外国とつながる子どもたちが多く集う学校があります。それぞれの子どもたちが背負うさまざまな歴史的な、文化的な背景を大切にしながら、この地で生



交流会で披露された朝鮮舞踊を踊る中学生たち

世界には、実にさまざまな「学び」の場があります。そこに集う人の表情もさまざまですし、そこで学ばれることの中味もさまざまです。それぞれに学ぶことの意味はいっしょでしょうか。それぞれに学ぶことの意味はいっしょでしょうか。

バングラデシュには、文字通り、日々の糧を得るために、自分たちの「居場所」を作る活動を自分の仕事に作り上げてゆくために、「読み書き」、「計算」を学ぶ子どもたちがいます。ネパールには、うち捨てられた経験を幼い身体に刻みながら、「居場所」を求める子どもたちがいます。

さまざまな理由から、

きてゆくための「日本語」の指導に心血を注ぐ先生がいます。学校を「学校」という枠に閉じこめずに、地域の自治会の人や保護者の人たちと協力しながら、いろいろな人が集まりやすい場にしようとする先生がいます。

今回の特集では、さまざまな学びの場を取りあげました。そこにかかわる人たちにとって、すべてが問題なくおこなわれているわけではありません。

しかし、ここに紹介した、それぞれの学びの場が大切にしているものがゆるやかにつながってゆけることが一つの希望であるように思われます。



ダッカのストリートチルドレン  
提供：(特活) シャブラニール

## 特集

## さまざまな学びの場



特定非営利活動法人

シャプラニール=市民による海外協力の会 事務局長 坂口 和隆さん

南アジアの貧しい人々の生活上の問題解決に向けた活動を現地および日本国内で行い、すべての人々が豊かに共生できる地域社会の実現を目指す民間の海外協力団体（NGO）。バングラデシュとネパールで、農村開発やストリートチルドレン支援など当事者主体を原則として活動続ける。

事務局長として精力的に活動を行い、また地元西東京市では障がいを持つ子どもたちの学びの場を考える会「はっきいねっと」などの市民活動にも関わる。様々な活動をとおして坂口さんが日頃感じている「学び」についてお話を伺った。

## ●シャプラニールの活動

シャプラニールは、海外援助・海外協力のための団体ですが、遠い国の人たちを援助することから、地球規模の「共生」社会の実現へと活動の方向性を変えています。同じ人間生活を営む中で様々な生活上の課題、問題に対応していくには、国に関係なく、共通の対話ができる切り口があるのではないかと、思っています。例えばコミュニティを再生・再構築していくこと、子どもと大人（親）との関係性の中で生まれる課題は、バングラデシュにもあり、日本にも共通しています。

私たちの活動には「当事者主体」という原則があります。つまり、自分の暮らしは自分で良くしようというものです。当事者の人たちが積極的に行動するのであれば、私たちは彼らができないことで協力するスタンスを崩さないようにしています。これは私個人が地域で行っている活動にも当てはまります。当事者が自分の抱えている課題を直視し、どう解決していくかに関わるのが大事であり、そうでなければ第三者がお手伝いをしてうまくはいかないですね。

## ●失敗から学ぶ

バングラデシュで行っている学びに関わる活動については、都市でなく農村のショミティ（注1）が中心となっています。私たちは最近では現地の活動を理想化して見せようとは思っていません。生身の人間が行なうため、ショミティの活動でも、当然のことながら様々な失敗もあります。しかし、私たちシャプラニールも課題を抱えながら活動しているんだという「素の私たち」を見せていかないと、何となく「シャプラニールってすごいね」「識字教育バンザイ」という感じに見られてしまいます。ただ単に良いところを見せて支援をお願いする、そういう時代はもう終わったのかなと思います。

もちろん、現在に至るまで数多くの失敗がありました。しかし、むしろ失敗したことをきちんとシェアして、昇華し、次につなげることが大切であり、シャプラニールはそのことを丁寧に行なってきたと思います。失敗を恐れるよりも果敢に挑戦し、その中から学んでいけば良いのではないかと思います。

## ●当事者主体の学び、参画

私たちの活動として、都市部において、働きながら路上で暮らす子どもたち（ストリートチルドレン）の支援を行っています。

バングラデシュでは、読み書きや計算を学ぶストリートスクールと子どもたちが安心してくつろぐことのできるドロップ・インセンターを運営しています。ネパールでは、元ストリートチルドレンが作った NGO があります。自分たちのした苦勞を、若い人たちには経験して欲しくない、という思いからできた団体です。その NGO と私たちが組み、子どもの居場所作りを目指し活動しています。順調にいかないことも多いですが、彼らの自分たちの居場所に対する思いはとて強くあります。今までは、自分たちが拾った鉄屑などを売る際には、換金する店の主人に不当な低価格で買い取られていました。そうした辛い思いを若い人たちにはさせないよう、ストリートチルドレンが拾っ

てきたものを適正価格で買い取る場を設けました。また、ようやく屋根ができたという段階ですが、寝泊りもできる居場所作りも行なっています。

## ●大切なこと

バングラデシュで子どもを対象としての活動を始めるにあたって私たちが大切にしたいことは、二つあります。一つは「子どもたちの参画」です。例えば「子どもの日」など普段スタッフがやっていることを、一日子どもたちが行なうことにより、自分たちの身のまわりに起こる問題を、当事者として主体的に考えていくことができます。

もう一つは「地域との関わり」です。ストリートチルドレンが活動している場合は、バスターミナルやバザールなど多くの人が集まる場所です。その場に関わる警察官、商店の主人などに、「地域で子どもたちを支えていく」という認識を深めてもらうよう働きかけをしたり、ストリートチルドレンと、地域の学校に通っている子どもたちが交流する場を設けました。

## ●国内・国外の活動から得るもの

シャプラニールで私は組織運営に携わっているため、その経験が国内の地域で行なっている市民活動において、意見の集約をする際などに大いに活かしています。西東京市で行なっている市民活動では、行政との交渉であったり、「障がい児」の学びの場をどう作っていくかを現場で考えます。やはり自分の生活に密着した現場である地域から学ぶことは多くあります。そして、西東京市の市民活動団体が、すべての子どもたちがその地域で暮らすことが当たり前の社会、それを認めあう社会を目指す過程は、バングラデシュのショミティが、子どもたちの日常生活上の問題について話し合い、解決を目指す過程と通じるものがあります。

## ●垣根を越えた関係

国際協力 NGO と国内で活動する NPO の間ではどうしても垣根があります。その垣根を取り払う必要性を感じたのは、自分が国内において市民活動をしているからです。

今、「NGO・NPO 草莽のつどい」（注2）という学びの場を有志で開催しています。各団体のスタッフが集まり、大先達の方々に講師に招き、団体ではなく一個人としての目標を話しあう道場のようなものです。普段顔を合わすことの少ない異なった分野スタッフ同士が話し合う中で、国外と国内の境を取り払うことができればとも思います。

NGO で活動していると、途上国など世界の状況には詳しくても、日本の地域のことに限ってはほとんど分からない、関心がないケースが多くあります。海外ではエキスパートとして活動をしていても、自分たちの居場所である地域のことに興味を持たなければ、どこか薄っぺらいものになってしまうと思います。

「自主自得」というのでしょうか、人間生活を営む上では、自ら学び、学んだものを仲間と共有すること、また、身の回りに起きている課題に対して、主体的にはたらきかけることが大切であると感じます。

注1 ショミティ…ベンガル語（バングラデシュの公用語）でグループを意味する。貧困住民を対象にした相互扶助グループ。自らの生活上の様々な問題について話し合い、自分たちの力で解決できるよう活動続ける。

注2 「NGO・NPO 草莽のつどい」

URL: <http://blog.goo.ne.jp/ngonpo-somo/>



## 横浜市立いちよう小学校 国際教室担当 金子 正人さん

昭和48年に横浜市泉区上飯田町の神奈川県いちよう上飯田団地の中に開校。外国籍児童および外国にルーツのある日本籍児童が多数在籍しているのが特色。国籍や民族の異なる子どもたちが、互いの違いを認めながら共に学ぶ多文化共生の学校づくりをめざす。

帰国・外国籍児童生徒に対する適応指導の充実を図るため、平成4年度より国際教室を設置している。横浜市立いちよう小学校で、外国につながる子どもたちの学びを支える国際教室担当教諭の金子正人さんにお話を伺った。

### ●いちよう小での学び

いちよう小学校では、外国につながる児童の多くは、日本で生まれ育っているか、日本での生活経験が長いので、日常会話に困るケースは少ない。しかし、年に何人かは日本語が全くわからない状態で編入してくる子どももいる。また、話すことは問題ないが、学習に参加するための言語を十分に身につけていない子どもたちもあり、そうした児童を対象に「読む力」や「書く力」を中心とする、学習に必要な日本語の力をつけるため活動している。

他の学校に比べると、教職員の労力もやはり多い。「私は子どもたちにとってこれは必要だなと思ったことは、どんどん提案をしていましたね。職員には負担をかけましたが」と金子さんは笑って言う。夏休みに入ってしまうと、それまで積み重ねてきた学習がとぎれ、せっかく身につけた学習内容や日本語を忘れてしまうことがあったので、地域ボランティアグループ『多文化まちづくり工房』や大学などと協働し、日本語学習教室を行なった。また昼間は時間をとれない保護者のために、夜

に懇談会を設けることもある。

教師の間で、学校の教育方針や運営に関して議論を重ねる機会は多かった。担任だけが課題を抱え込むのではなく、学校の全職員が一丸となって子どもたちを育てていくことを基盤に、取り組んできた。「目の前にいる子どもたちを大切にしよう」という思いを共有できたからこそ、今日まで続いてきたと振り返る。

また、金子さんは「支援の必要な児童に、必要に応じた支援をする」という。外国籍児童生徒だけではなく、すべての児童たちに寄り添い学びを伝えてきた。

### ●様々な場での学び

学校と地域の信頼関係が段々と築かれたことにより、外国籍児童生徒の支援活動の連携は進んだ。子どもたちのことを一番に考え、様々な問題を共有して話し合う場を設ける機会も多い。そうした地域の人たちとの話し合いから、金子さん自身が気づき、学ぶことも多くある。また、今年4月から金子さんは、学校現場から離れ、派遣研究生として東京学芸大学に通っており、大学では、人権教育に関する研究をしている。「教室という現場ではない場所だからこそ出会える人や学びは多く、現場に復帰した時にも必ず生きてきます」という。教室だけでなく地域・大学といった様々な場面で、金子さん自身が「学び」を得ることが多くある。(W)



## 横浜山手中華学校 校長 潘 民生さん

1898年、孫文により「大同学校」「華僑学校」「中華学校」が創立された。合併・分裂を余儀なくされ、1953年に、山手町に新しい校舎を建設し、1957年には校名を「横浜山手中華学校」と定めた。現在、幼稚部、小学部、中学部に411名の生徒が在籍し、中国から招へいた教師、日本人教師と華僑教師が一丸となり中国文化の伝承を柱に、日本文化をも重視した国際性ゆたかな教育、能力開発教育を推し進め、バイリンガルにして創造性を兼ね備えた人材の育成を旨としている。

2005年9月23日、横浜山手中華学校では「遊芸大会」が行なわれ、中国語・日本語・英語の劇や合唱、獅子舞など中国の伝統舞踊が発表された。準備期間は夏休みが明けてからの約2週間程。短期間の練習とは思えないほどの完成度の高さ、生徒たちの活き活きとした表情の裏には、日頃から生徒たちに対し熱意をもって指導を行なった教員の努力が窺えた。「遊芸大会は日々の学びの積み重ねを発表する場」と説く潘校長先生にお話を伺った。

### ●中華学校の教育

中華学校に通っている生徒のうち、両親共に日本人である生徒が2割弱。創立当初は民族学校としてスタートしたが、やがて「中国語と日本語のバイリンガル教育」という教育内容が、日本人を引きつけていった。日本人生徒たちは、入学した時点では中国語を話すことはできない。近年では、中国籍の児童であっても家庭内で中国語を話す機会がなく、日本語しか話せない生徒も多い。

それでも、遊芸会当日では中国語を学びはじめてまだ4ヶ月という生徒が、中国語で開会のあいさつを述べた。日頃から「中文」、その他の科目でも中国語での授業を積極的に実践しているからこそこの結果である。

「学校は、子ども達の能力を開発していく場である」と潘先生は言う。教師から一方的に教えるという受身の授業ではなく、生徒たちが主体的に関わっていく授業カリキュラムを実践している。例を挙げると、日々の授業にはもちろん反映されているが、毎年中学2年生は修学旅行で中国を訪問し、帰国後は生徒

たちによる報告会を小学1年生～中学1年生を対象に行なう。中国で学び感じた伝統文化や歴史を、後輩たちに自らの言葉で伝えていく場を設けている。

また、遊芸大会のプログラムには必ず伝統舞踊である「舞獅(獅子舞)」が組み込まれている。高学年と低学年がペアになり、躍動感あふれる舞いを披露する中で、観客に、そして先輩から後輩に、変わらず大切に育んできた中国文化・歴史を伝えていく。

廊下や教室には運動会の感想文や絵画など、数多くの作品が貼られている。こうした作品は、生徒はもちろんのこと、学校を訪れた教育関係者や使節団、そして近隣の方たちの目にとまり、自ずと作品は比較され、評価されることもある。潘先生は「生徒同士が互いに比較しあい、より良いものを求めて時には競争することも必要です」と言う。学校を卒業し、やがて社会に出たときには避けては通れない「競争」をも見据えた考えである。

### ●これから目指すもの

中国語と日本語のバイリンガル教育、能力開発教育を全面に打ち出し、現在は定員以上の応募があり、中国籍の児童でも入学を断られるほどの人気校である。しかし、文部科学省が認めた正規の教育機関ではない。教育内容も他の小中学校と遜色なく行なわれているにもかかわらず、不合理である。そうした現状を変えるためにも、潘先生は「もっとこの学校を見に来て欲しい。そして生徒たちの学びに対する積極的な姿勢を知って欲しい」と言う。(W)



## ハートフルンたまごの輪

「ハートフルンたまごの輪」（ニックネームは「ハトたま」）は不登校の子どもたちの居場所をつくるためにつくられた。横浜市教育委員会の不登校の子どもたちを対象にした事業「ハートフルスペース」で出会った親たちが、限られている不登校の子どもたちの成長の場を少しでも広げようとした自主活動グループ。

「ハートフルンたまごの輪」に集う保護者たちからの意見を大切に、日々の活動をつづける保護者たちにお話を伺った。

### ●「ハトたま」ができたわけ

「ハートフルスペース」は、横浜市内には都筑区と中区があり、週2回各90分、スポーツと創作の時間が設けられている。不登校の子どもを対象にした唯一の公的な場として貴重な場であると言える。しかし、「不登校」と一口に言っても、そこに至った原因はひとつではないし、子ども一人ひとりの育ちの状態は多種多様だ。他者との接触が苦手、完璧主義がまわりに受け入れられない、みんなといっしょに動くことができない、体力がついていかない、特定の事柄以外のことになかなか興味が持てない…。その意味で「ハートフルスペース」のプログラムは不登校の子どもたちの多様性に十分に対応できるプログラムにはなっていないのが現状だ。利用している子どもも、不登校の子どもも全体（3,000人強）の10分の1に満たないという。代表のワスナニ・モニカ・孝子さんは、「彼らはどこにいるのだろう？ 毎日をどう過ごしているのだろう？ 不登校は社会の中でタブーのようにになっているから保護者同士が意見を共有する場が必要だと感じた。そして自分の子どものことなのに全部他人に解決してもらわないといけないということにもどかしさを感じた」と言う。

### ●「学校」がすべてなのだろうか？

国際結婚をしたワスナニさん。子どもはインドで生活した後、小学生のときに日本に渡ってきた。インドで培った文化は子どもにとっての「自信」の源になると信じていたが、最初に通った英語話者のための学校で自分の肌の色が尊重されなかった経験を持つ。子どもが「ブラウンの肌はダメなの？」という言葉が発してしまう「そこ」は、どんな場であったのだろうか。その後、日本の公立学校に転校したが、日本語による表現がうまくゆかず勉強が「恐怖」になってしまったという。

「親以外の人に認めてもらうことが大事だと思う。信頼できる大人に出会える機会をつくりたい。努力してそういう場所を

つくることで、それぞれの子どもが同年代の人との交流を増やしていければよい。子どもたちが自主的にやりたいことを見つけたら、それを応援していきたい…」。

「ハトたま」に集っている他の保護者はこう言っていた。「個性的なことが尊重されるべきという建前はあるけれど、実際には、学校では『個性的』な人がいっぱい多いのではないかな。そういう子どもは学校にとっては手がかかるから…。無理矢理そういう学校にあわせようとして疲れてしまう子どももいるのではないかしら…。限られた時間や不足しがちな人材という難しい条件の中で、子どもの育ちの状態や文化的な背景を、かけがえのない「個性」として尊重するような取り組みに懸命に努めている学校もあるだろう。しかし、そのような取り組みは、いまのところまだまだ限られたものとなっていないだろうか。「不登校」の子どもたちの数が、そのことを語っているように感じた。すべての場合は、知らない間に、「学校」に適応できた人たちによって、「学校」で学んだことを前提としてしつらえられているのかもしれない。

### ●痛みのエネルギー

「ハトたま」では子どもたちが自分たちのホームページをつくったり、物語づくりなどの活動をはじめつつある。「信頼できる大人」が遠くからさりげなく手をさしのべている。取材の日、ふと、子どもたちが、「座布団なげ」を始めた。ここでの「恒例」になりつつあるという。にぎやかに飛び交う座布団。ずっと発散されることを待っていたかのように、座布団には子どもたちのエネルギーが込められている。投げられた座布団のねじれ具合のなかに、子どもの背負っているものがほのかに見え隠れするように思う。当たると少し痛い。決して私に傷跡を残さない形で与えられるこの「痛み」が、何かを私に問うているように思った。様々な場所で唱えられる「多様性」の外側で息をひそめるしかない存在に、少しでも息継ぎができる場が、もっともっとたくさんつくられてよいと思った。(K)



## 神奈川朝鮮中高級学校・横浜朝鮮初級学校

朝鮮学校は、その多くが1946年、朝鮮半島が日本の植民地から解放された直後に日本の各地にいっせいに建てられた。奪われていた朝鮮語と民族の文化や歴史を取りもどし子どもたちに教えるためだ。47年には578校、生徒は6万人を超えており、この段階ですでに体系的な民族教育がおこなわれていたが「学校」とみなされず、さまざまな不利益を被ってきたその歴史は決して平坦なものではなかった（『朝鮮を知る事典』平凡社）。

映画『パッチギ』や『GO』で注目されている朝鮮学校。しかし、その現状や、実際におこなわれている教育のカリキュラムについて知っている人は少ないのではないだろうか。晴れた秋の一日、公開授業を訪ねてみた。

### ●「国語」の授業 ルポルターージュのアクティビティ

「先生の初恋はいつですか？」「中学生のときの夢はなんですか？」…。生徒たちの等身大の質問が飛び交う。中学3年生の「国語」（朝鮮語）の授業は生徒たちのそんな質問で始まった。「初恋は…5才のときでしたね。先生の答えに大きな歓声があき起こる。授業の単元は「ルポルターージュ」。「〇〇先生を取材する」というテーマで、おのおのの生徒が用意してきた質問を発表しそれに先生が答える。生徒たちは先生の答えを聞きながら要点をノートに記す。一通り質問が終わるとグループに分れて意見をまとめ、最後にグループごとに発表する。朝鮮舞踊の舞踊家をめざしたが技術的な壁にぶつかり、パフォーマーではなく舞踊の作家としての道を選んだこと、そのために民族学校で教鞭をとりながら舞踊と「国語」を教えていること…。自分たちにとっても切実な進路に関することでもあるからだろう。「夢」に関する質問への答えがとくに印象に残ったようだ。自分たちの先輩にあたる先生から、人生を歩むときに突き当たる壁と格闘した話は、「マイノリティ」を生きる生徒たちにとって、他では聞くことのできない「生きる典型」に触れる貴重な経験になっているように感じた。

### ●相互の対話

当日は美術、日本語、数学などの授業も公開されていた。どの教室も朝鮮語での授業であること以外、日本の学校と大きな

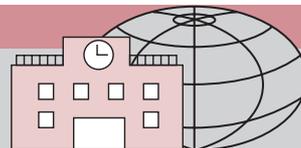
違いがあるようには感じなかった。当日の公開授業はなかったものの「面白い」と評判の英語担当のチャン・マルリョさんに話を聞いた。「カリキュラムは、だいたい10年に一回、改訂しています。本国との協議と併せて、保護者からもアンケートという形で意見を吸収します。日本に暮らしている私たちの生活の実情に合ったカリキュラムにしなければなりませんから」。日本の学校と同じように、全国レベル、地方ブロックレベルでの教育研究会も2年に一回おこなっているという。「私が力を入れているのは、コミュニケーションな授業です。知識を受け取るだけの学習ではなく、自分からも積極的に意見や主張を発して他者と対話をおこなっていく、そんな姿勢を養うことが大事だと思っています」。

### ●開いてゆくということ

チャンさんがコミュニケーションな英語授業の実践を進めるうえで、大きな役割を果たしている同僚がいる。ザンビア出身のサマンサさんだ。彼女は選択授業を担当している講師で、その明るく能動的な授業の進め方が生徒たちに人気だそう。「生徒だけでなく、私たち教師もコミュニケーションでありたいと思っています。実は、朝鮮学校の先生方は話が上手な人が多いのです。講演に呼ばれて出ていくこともありますね」とチャンさん。「大事なのは、自分の根っこを知ること、その上で開いてゆくこと。生徒たちには、自分の根っこをしっかり理解したうえで、広い世界に向かって羽ばたいてほしいと願っています。」「コミュニケーションであること」とは、さまざまな差別待遇をくぐり抜けてきた朝鮮学校全体が、いま、対話をおこなうパートナーとして日本の社会を真剣に見つめ、自らを積極的に開いていこうとする意志の現れであるように感じた。(K)

## 地球市民フォーラム

## 「世界のがっこう」プレセミナー



あなたはこれまで、どんな「学び」を経験してきましたか？  
これから、何を学んでいきたいですか？

グローバル化がすすみ、世の中が急速にかわっていきます。  
その中で、ともに豊かに生きていくために、どんな「学び」が、  
そして、どんな「学びの場」が必要でしょうか？

海外教育協力と多文化共生を切り口に、講師を囲んで、参加  
者同士の交流も交えながら、「学校」「学び」について考えてみ  
ませんか。

身体を動かしたり、参加者自身の「学び」についてふりかえ  
るなど、参加型の活動を取り入れた連続セミナーを開催します。

### 第1回 生きていくための学び ～バングラデシュで、日本で

- 日 時：12月3日(土) 14:00～17:00
- 講 師：坂口和隆さん(シャプラニール=市民による海外協力の会 事務局長)

### 第2回 近未来のがっこう？ ～外国の子どもが半数をこえたら

- 日 時：12月17日(土) 14:00～17:00
- 講 師：金子正人さん(横浜市立いちよう小学校教諭)

### 第3回 豊かな学びって？ ～オーストラリアのシュタイナー学校の実際から、日本の学びを考える

- 日 時：2006年1月7日(土) 14:00～17:00
- 講 師：永田佳之さん(国立教育政策研究所 主任研究官)

### 第4回 カンボジアのがっこう ～わたしがっこうとどう違う？

- 日 時：2006年1月29日(日) 14:00～17:00
- 講 師：阿木幸男さん(カンボジア教育支援基金代表、成蹊大学講師、河合塾 COSMO 講師)
- ゲスト：カンボジアからの留学生(予定)

## 共通事項

- 場 所：あーぢ 355 1階 ワークショッブルーム  
(第2回のみ大会議室)
- 対 象：これから何を学んでいこう？と悩む高校生・大学生  
子どもにどんな学びを？と悩むお母さん・お父さん  
私の学びはこれからだ、と考えるシニアの皆さん  
さまざまな学びの場にかかわる方
- 定 員：各回25名
- 料 金：無料
- 申込み方法：申込用紙に必要事項を記入して郵送・FAX または E-mail でお送りください。  
(申込用紙は下記連絡先に請求、または HP よりダウンロード可)  
※期日までに定員に達しない場合は、当日参加も受け付けます
- 問合せ・申込み：国際協力課(担当：成田)  
TEL：045-896-2964 FAX：045-896-2945  
E-mail：minsai@k-i-a.or.jp  
※祝日除く月曜休み

※このセミナーは、2006年2月5日(日)に行われる地球市民フォーラム「世界のがっこう」のプレセミナーとして行われます。  
2月5日(日)には、海外教育協力・多文化共生にかかわる神奈川県内の様々な学びの場にかかわる人たちが、自らの実践やのぞましい学び(学びの場)のあり方について語り合うフォーラムを開催します。(11:00～16:00の予定)  
1月28日(土)～2月5日(日)に展示・映画等関連企画あり。  
※長倉洋海さん(写真家)講演会と写真展も予定されています。  
(講演：2月4日(出)午後、写真展：1月28日(土)～2月5日(日))  
アフガニスタンの山岳地帯で行われている教育支援の様子を紹介します。詳しくはお問い合わせください。

## 神奈川県国際交流協会・会員のつどい

## 映画 「八月のクリスマス」 上映会

現在上映されている日本映画「8月のクリスマス」の原作である韓国映画。緑の八月から純白のクリスマスへ。限られた時間の中で芽生えた初めての、そして最後の恋。ハン・ソッキュ、シム・ウナが主演する、韓流ブームの火付け役になったピュアなラブ・ストーリーの名作。

- 日 時：1月7日(土) 14:00～(13:30開場)
- 場 所：あーぢ 355 2階 プラザホール
- 参加費：国際交流協会会員400円、前売り・高校生以下600円、一般800円  
\*前売りは、あーぢ 355 に来場された方にのみ販売いたします。  
電話等でのご予約はできませんのでご了承ください。
- 問合せ・申込み：企画情報課(担当：キム)  
TEL：045-896-2896  
※祝日除く月曜休み



世界の文化セミナー

**韓国・朝鮮 料理講座**

～ 年末年始、わいわい楽しむ家庭料理 ～

韓流映画やドラマを見ていると必ずといっていいほど出てくる食事のシーン。寒くなってくると恋しくなる身体の芯からポカポカ温まるお料理の数々！ぜひ、わいわい楽しみながら韓国・朝鮮の家庭料理にチャレンジしてみましょう！

●日 時：12月6日・13日・20日 10：00～14：00  
(各火曜日・全3回)

●場 所：あーだ 355 1階 料理室

●メニュー (順番と内容は予定です)

第1回 ゆで豚、サラダキムチ、ジャガイモのジョン、なつめ茶

第2回 九節板 (クジョルパン)、びっくりおいなりさん、くるみの干し柿巻き、生姜茶シナモン風味

第3回 トックック (お雑煮)、卵付け焼き・盛り合わせ・水キムチ、ゆず茶

●講 師：権 榮淑 (クオン ヨンスク) さん

現在、横浜コリアン文化研究会などで韓国語講師をつとめていらっしゃいます。韓国語教師として活動しながら一人の主婦としての経験を活かして韓国料理を紹介する活動 (非定期) を行っています。

●定 員：18名 (先着順)

●料 金：10,500円 (3回分・税込) \*協会会員は9,450円



●問合せ・申込み：

国際協力課

TEL：045-896-2964

FAX：045-896-2945

E-mail：minsai@k-i-a.or.jp

※祝日除く月曜休み

## カンボジアスタディツアー 参加者募集!!

財神奈川県国際交流協会では、下記の内容で行うカンボジアスタディツアーの参加者を募集しています。

NGO 団体等の活動現場を訪問・見学し、スタッフの方からお話を伺うとともに、カンボジアの人々と積極的に草の根の交流を図る事で、ツアー参加者の国際交流・協力への意識を高め、国際性豊かな人材の育成を目指します。

●実施期間：2006年2月27日 (月)～3月8日 (水)

●訪 問 地：カンボジア王国 (プノンペン、プレイベン、シェムリアップ)

●旅 程

日 付	旅 程
2/27 (月)	出国→カンボジア到着
2/28 (火)	市内観光→国際保健協力市民の会 (SHARE) 訪問
3/1 (水)	SHARE 訪問
3/2 (木)	プレイベンへ移動→カンボジア日本友好学園訪問
3/3 (金)	カンボジア日本友好学園訪問
3/4 (土)	カンボジア日本協力センター訪問
3/5 (日)	シェムリアップへ移動
3/6 (月)	上智大アジア人材養成研究センター/アンコールワット遺跡修復現場訪問
3/7 (火)	アンコール遺跡見学→出国
3/8 (水)	帰国

●対 象：神奈川県内に在住・在学または在勤し18歳以上25歳未満である方

●募集期間：2005年10月25日 (火)～11月25日 (金)

●定 員：20名 ※書類と面接による選考を行います。

●参 加 費：80,000円

●問合せ・申込み：国際協力課 (担当：水野)

TEL：045-896-2964 FAX：045-896-2945

E-mail：minsai@k-i-a.or.jp

※祝日除く月曜休み

アートと環境ワークショップ

**自然の絵の具で絵を描こう**

作品 展 覧 会

いたち川や本郷ふじやま公園で採取した、土や葉を絵の具にして描いた作品、約60点を下記4箇所で開催します。地元の自然を素材にして、どんな絵が描かれたのか、ご覧ください。

併せて、いたち川の自然を写した写真や、版画もご紹介します。

●日 時：11月1日 (火)～11月13日 (日)  
9：00～17：00 ※備考①、④のみ

●場 所：①あーだ 355 5階架け橋 (月曜休館)

②いたち川沿いフェンス (栄区役所、扇橋の水辺付近)

③本郷小学校沿いフェンス

④本郷ふじやま公園 古民家内 (第一水曜休館)

●対 象：一般

●料 金：無料

●主 催：神奈川県 (地球市民かながわプラザ)

財神神奈川県国際交流協会

●共 催：横浜市栄区役所

●協 力：いたち川 OTASUKE 隊、

本郷ふじやま公園運営委員会、

本郷小学校

●問合せ：地球市民学習課

(担当：横山)

TEL：045-896-2899

FAX：045-896-2945

E-mail：gakushu@k-i-a.or.jp

※祝日除く月曜休み



神奈川県国際研修センター

**センター・デー**

アジア、アフリカなど海外11カ国からの研修生・留学生が宿泊するセンターのお祭りです。研修員・留学生による歌や踊りに加え、日本の伝統文化である和太鼓の演奏があります。展示と歓談のコーナーでは、研修員の出身国のパネルを展示します。秋の一日、身近な国際交流を体験してみませんか。

●日 時：11月20日 (日) 12：00～16：30

●場 所：神奈川県国際研修センター (相鉄線二俣川駅から徒歩20分又は運転試験場循環バス中尾町下車徒歩1分)

●入場料：無料

●プログラム

◆12：00～ 研修生・留学生によるミニ屋台

◆13：00～ 歌と踊りのパフォーマンス

①タイ、ウズベキスタン、

カンボジア、モンゴル、ル

ワンダ、中国、韓国、マレー

シアなどの研修生・留学生

による歌と踊りなど

②和太鼓

◆14：45～ 研修生によるミニ

レクチャー

①モンゴル (14：45～) ②カンボジア (15：45～)

◆15：00～ 留学生との語り合い広場

◆15：00～ 研修生による料理教室

(事前申込有料・先着12名)

簡単でおいしいタイ料理を作ってみませんか。

◆12：00～16：30 展示と歓談のコーナー

民族衣装の試着、モンゴルの占い、留学生による中国茶

芸の実演など。

●問合せ・申込み：神奈川県国際研修センター

TEL：045-366-0157 FAX：045-366-0164

E-mail：kpito@k-i-a.or.jp

※祝日・月曜休み



★神奈川県国際研修センターは、神奈川県が設置し、財神神奈川県国際交流協会により運営されています。

★プログラムの内容は変更になることもありますので、あらかじめご了承ください。

## 民族音楽ワークショップ

世界のいろいろな音楽と踊りを体験しましょう  
「音楽と踊りの祭典」

民族楽器を楽しみながら練習し、発表会を開きます。親子参加も大歓迎。自由参加ですので上手にできなくても大丈夫。リラックスして楽しみましょう。

- 日 時：11月26日(土) 13:30~16:00  
練習 13:30~15:00  
発表会 15:00~16:00  
※観覧だけの方は15:00頃にお越しください。
- 場 所：**あーだ 355** 2階 プラザホール
- 講 師：三縄公一さん(鎌倉女子大学教授)  
山口悦朗さん(スチールパン製作者)
- 協 力：鎌倉パーカッションクラブ
- 対 象：一般
- 定 員：特になし  
(事前申込不要)
- 参加費：無料
- 問合せ：地球市民学習課  
(担当:藤由)  
TEL: 045-896-2898  
※祝日除く月曜休み



## 地球市民学習リーダーセミナー

開発教育ってなあに？  
いつでもどこでもだれでもできる学び

写真を見ながら多様な文化の価値について考えることができるフォトランゲージキット「地球の仲間たち」と、異なる文化や人を理解することの深さについて考えられるカードゲーム「レヌカの学び」を体験してみませんか？きっと開発教育の“まなびの道具”を作ったり、開発教育の実践をしてみたいくなりますよ。

- 日 時：11月19日(土) 13:30~16:30
- 場 所：**あーだ 355** 1階 会議室&ワークショップルーム
- 対 象：NGO 活動やボランティア活動に興味がある人  
活動に参加してみようと思っている人など
- 定 員：30名
- 料 金：無料
- 申込み方法：電話、FAX、E-mailのいずれかの方法で、(1)講座名、(2)氏名(ふりがな)、(3)所属(学校名や何か参加している団体など)、(4)連絡先(電話、FAX、E-mail)。
- 問合せ・申込み：企画情報課(担当:藤分(ふじわけ))  
TEL: 045-896-2896  
FAX: 045-896-2945  
E-mail: kikaku@k-i-a.or.jp  
※祝日除く月曜休み



## 食と暮らしの体験セミナー

「スラマツシアン！  
インドネシアってどんな国？」

「食」や「遊び」を通して様々な国や文化を体験する、子ども主体のセミナーです。

インドネシア出身の方と、インドネシアの料理作りや遊び・文化などを体験します。

- 日 時：12月18日(日) 10:00~14:00  
(受付開始は9:40)
- 場 所：**あーだ 355** 1階 料理室、ワークショップルーム
- 内 容：
  - 午前～昼 インドネシア料理を作ろう！  
ミーゴレン、ソトアヤム(スープ)  
ピサンゴレン(バナナのアイスクリーム)
  - 午後 インドネシアの遊び・文化体験 など
- 対 象：小・中学生(親子での参加も可。外国籍の方大歓迎。)  
※内容を変更することもあります。予めご了承ください。
- 持ち物：エプロン、タオル、ふきん、三角巾(バンダナでもOK)
- 定 員：25名(事前申込制、先着順)
- 料 金：ひとり800円(食材費)
- 問合せ・申込み：地球市民学習課  
(担当:木下加奈子)  
TEL: 045-896-2899  
FAX: 045-896-2945  
E-mail: gakushu@k-i-a.or.jp  
※祝日除く月曜休み  
※幼児保育あり(参加者の妹・弟のみ)

地球市民メッセージコンテスト  
審査結果発表

審査の結果、次の方々の作品が入賞しました。(敬称略)

- ◆**ポスター優秀賞**
    - <小学生> 種物谷莉央、鶴殿 侑弥、旭 水色、  
金網蒔友子、小町 佑馬、永倉 咲良
    - <中学生> 紫尾 沙帆、宇津木美咲、竹光 美貴  
(他、佳作20点、努力賞28点)
  - ◆**作文優秀賞(中学生対象)**
    - 小石 幸子、渋谷志於里  
(他、優秀賞8点、佳作・努力賞各10点)
- 今回入賞したポスター作品は、12月10日(土)から18日(日)まで、**あーだ 355** 3階企画展示室で展示します。入場無料。

## ポスター入選作品展 関連企画

## 高校生平和大使と考えよう！ 私たちにできること

被爆地長崎の平和団体により選ばれた小檜山なつ子さんを中心に、国連欧州本部(ジュネーブ)を訪問し、核軍縮を訴える署名集めなど平和を訴える活動を行ってきた高校生による「平和を考える」報告とワークショップを行います。中学生、高校生の皆さん、一緒に平和について考えてみませんか。

- 日 時：12月10日(土) 13:00~14:00
- 場 所：**あーだ 355** 1階 ワorkshopルーム
- 対 象：中学生・高校生
- 定 員：30名
- 料 金：無料
- 申込み方法：氏名、住所、連絡先電話番号・FAXを添えて下記までお知らせ下さい。
- 問合せ・申込み：国際協力課(担当:成田)  
TEL: 045-896-2964 FAX: 045-896-2945  
E-mail: minsai@k-i-a.or.jp  
※祝日除く月曜休み

2005年度前期

かながわ民際協力基金 助成・協働事業決定

●助成事業 第72号

『イスラエル・パレスチナ NGO との交流と対話～草の根の活動から見る紛争地の平和・人権・健康～』

●団体：(特活) 日本国際ボランティアセンター (JVC)

●事業分野：担い手育成

●助成額：19万6千円

●事業概要：人権と保健医療の分野で活動するイスラエル・パレスチナの NGO の関係者を神奈川に招聘し、市民、NGO 関係者、学生などが広く参加できる交流と対話の場を設け、平和・人権・人道支援についての理解を深めるとともに、関連する活動の担い手を育成。

●協働事業 第2号

『外国につながる子ども支援に関わる人材育成事業』

●団体：「かながわ外国人教育相談」人材育成プロジェクトチーム

●事業分野：国内協力

●支援額：30万円

●事業概要：外国人の教育、特に外国につながるを持つ学齢期の子どもたちの教育をサポートできる人材の県内各地域での発掘とネットワーク化、および「かながわ外国人教育相談」に関わる相談員の専門性と能力の向上を目的として、講座・研修会を県内数か所で行う。

※協会では、2005年10月8日に発生したパキスタン地震の被災者支援、その他緊急支援事業の申請を随時受け付けております。詳しくはお問い合わせください。(担当：国際協力課 TEL: 045-896-2964)

エスニックレストラン新規提携店紹介

ベトナム料理 「サイゴンフレイヴァ」

広々としたスペースに、白を基調としたシンプルなインテリアがおしゃれなお店。サイゴン出身の速水大士さん(ベトナム名：ホ・グオック・フウさん)と友里さん(グエン・ティ・ナムさん)のご夫婦が「食の楽しさを提案したい」との思いから、2003年にオープンしました。

人気の生春巻きやフォー(ベトナム麺)をはじめとして本格的な料理を多彩に揃えており、ベトナムコーヒーが付くランチセットもあります。お店では、ベトナムの陶器や工芸品も販売しています。ベトナムに旅行する前に、話を聞きに来るお客さんも多く、お料理やベトナムに関するおしゃべりも楽しめます。



●会員特典：飲食代金の5%を割引。一人につき4,000円以上の場合は、飲食代金の10%を割引。

●所在地：大和市南林間1-7-19 シンソビル2F

●TEL：046-276-0043

●URL：http://www.saigonflavor.net/

●交通：小田急線「南林間」駅西口より徒歩1分

●営業時間：11:00~14:00、17:00~23:00

●定休日：火曜日



※提携エスニックレストランの「カランボ(スリランカ料理)」が閉店しました。これまでのご利用ありがとうございました。

大橋 巖さん

会員の声

国際交流協会の理念の一つに内なる国際化がある。年間、外国からの入国者は400万人を超えている。労働力確保のこともあり、これからも増え続けるものと思われる。これらも戦前、戦中から住んで居られる外国人も神奈川県には多い。私の住んでいる港南区でも外国人登録をしている外国人は2,000人を超えている。その外国人の方々が、ちゃんと日本の社会生活に馴染んでいられるか心配している。いずれにせよ災害時、例えば大地震が起きた時どうするか。在日外国人全体として弱者と考え、被害を受けた時にどうするか対応する必要がある。

上大岡第一町内会として、このたび、国際交流協会の協力をえて、災害時における緊急避難に必要なことを、中国語、韓国語、英語、スペイン語それに日本語のマニユアルにして勉強会を開くつもりでいる。来る12月3日(土)の午後1時から。在日外国人の方々、是非、港南区上大岡第二町内会館までお越し願えればと思う。(上大岡第一町内会長)

●2005年7月号から「会員の声」を開始しました。原稿をメールかファックスでお寄せいただいた方の声を掲載いたします。誌面の都合で編集する場合、掲載が不可能になる場合があります。予めご了承ください。

**Hello Friends 2005年11月1日発行 第247号**

発行/財団法人 神奈川県国際交流協会 〒247-0007 横浜市栄区小菅ケ谷1-2-1 神奈川県立地球市民かながわプラザ1F  
TEL: 045-896-2626 FAX: 045-896-2945 URL: http://www.k-i-a.or.jp E-mail: kikaku@k-i-a.or.jp 印刷/JFEジーエス株式会社

本郷台駅 徒歩10分

ALICE WILDSIDE

Indian Jewelry & American Goods

〒247-0008 横浜市栄区本郷台2-31-20 tel&fax 045-893-3647  
平日 11:00-17:00 | 土日 12:00-18:30 | 定休日 火・木・祭日

www.usroute66.org

『Hello Friends』では、2005年7月号から各ページに広告を掲載するスペースを設けることといたしました。

県内で国際協力・国際交流活動を展開している市民活動グループをはじめ、図書館、公民館、パスポートセンター、県立高校、市町村国際担当部署、市町村教育委員会、市区町村、県庁、個人会員などに配布しています。発行部数は6000部です。

国際協力・国際交流に関心をお持ちの団体、個人へのPRが可能です。どうぞお気軽にお問合わせください。

公序良俗及び法律等に違反する場合、もしくは当協会が不適当と判断した場合には掲載しかねる場合がございますので、予めご了承ください。

●神奈川県国際交流協会(KIA)は—地球のすべての人が、国境や人種、文化の違いを越えて、人間らしく暮らせる社会の実現のため、人と人のつながりを大切に「国際交流」「国際協力」を推進する様々な事業を展開しています。

●あなたも会員になりませんか？  
協会の活動を支える会員を募集しています。会員になると

- ①協会が主催する各種催しや国際交流団体、NGOの催し情報、ボランティア情報を掲載した『Hello Friends』をお送りします。
- ②当協会の出版物の割引サービスが受けられます。
- ③会員の方を対象にした催しへご招待します。
- ④『エスニック・レストラン・マップ』をお送りします。
- ⑤会員証の提示で、提携エスニック・レストランの優待サービスが受けられます。
- ⑥ **あーぢ 355** のレストラン「メルヘン」でお食事の場合、会員証の提示で、コーヒー、紅茶、グラスワイン、ソフトドリンクの一品サービスが受けられます。
- ⑦ **あーぢ 355** ショップ「ベルダ」で2,000円以上(税別)購入の場合、会員証の提示で10%割引が受けられます。

年会費：一般	3,000円から
学生	1,500円から
団体	10,000円から

\*会員登録をご希望の方は、協会までお問い合わせください。振込用紙など関係資料をお送りします。

★当協会は、2003年4月より、**あーぢ 355** の施設運営を含めた全事業を神奈川県から受託しました。

神奈川県国際交流協会  
あーぢ 355 (地球市民かながわプラザ)内

至大船 至横浜

本郷台駅 JR根岸線

駅前広場 スーパー

横浜銀行

●県立柏陽高校

このほか、神奈川県国際研修センターと神奈川県国際学生会館を運営しています。

\*ハローフレndsに掲載されているイベントへのお申し込みの際にお知らせいただいた個人情報は、イベント受付以外の目的には使用いたしません。